KCE

Kawaguchi Chamber Ensemble

川口室内合奏団

第 7 回演奏会

2022 年
11 月 5 日（土）
13:30 開場
14:00 開演

リリア
音楽ホール

ご挨拶

団長　山口尊実

本日は、川口室内合奏団第 7 回演奏会にご来場下さいまして、まことにありがとうございます。おかげさまで、7 回めの演奏会を開催することができました。重ねて御礼申し上げます。

いきなりのわたくしごとで恐縮ですが、中学時代にたまたま管弦楽部に入り、オーケストラの世界に入り込んでいったのですが、当時は、バッハ、ベートーヴェン、ブラームス、ストラビンスキー等にはまってました。（もちろん、チャイコフスキーやドヴォルジャークその他の巨匠にも、ですが）特にブラームスの 4 つのシンフォニーには惚れ込んでいました[*1]。

ブラームスはいわゆるロマン派ですが、彼の根底にはバロック、バッハがあります[*2]。私はバッハにもブラームスにも惚れてしまったわけですが、惚れてしまうというのは、どういうことなのでしょう？　「好きなタイプは？」「好きになった人」という俗な会話がありますが、あとあと分析してみると、理由というか原因がわかるものです。中学時代の何も分からない私もブラームスの根底に流れるバロックを感じていたのかもしれません。

ということで、前半は、いつものようにバロックの世界をお楽しみください。ヴァイオリン・ソロでバッハを、次に、ヴィヴァルディの『四季』から『秋』です。秋に秋をできました！　そして、今回はオーボエ・ダモーレです。楽しみください。

後半は、ハイドンの交響曲は第 34 番と 59 番「火事」です。詳しくは解説をお読みください。モーツァルトは、交響曲第 11 番です。偽作との噂もありますが、どうお感じになるでしょうか。お楽しみ下さい。（本日は予習をしないでいらっしゃいましたか？）

今回は、「形式」「ビブラート」について書きました。ご一読いただけると幸いです。

Program

J. S. Bach　無伴奏ヴァイオリンパルティータ第 2 番より
A. L.Vivaldi　協奏曲第 3 番ヘ長調 RV293 『秋』
J. S. Bach　オーボエダモーレ協奏曲 BWV1055

＜休憩＞

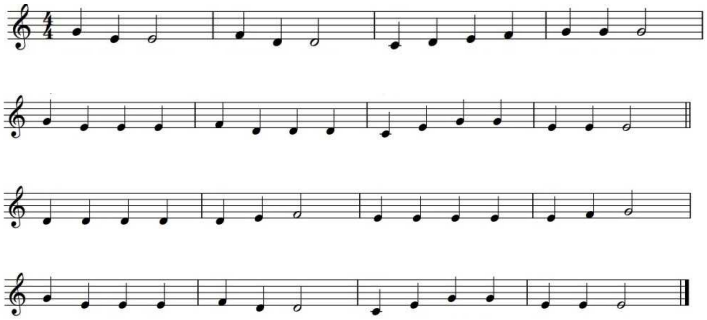
F. J. Haydn　交響曲　第 34 番 イ長調 Hob.I-34
F. J. Haydn　交響曲　第 59 番 ニ短調 Hob.I-59
W. A. Mozart 交響曲　第 11 番 ニ長調 KV84

---

*1 のちにワグネリアンとの確執を知ることになるのですが、私は当時ワーグナーはほとんど知りませんでした。。。

*2 交響曲第 4 番の終楽章はシャコンヌ。シャコンヌ（とパッサカリア）については P11 の注*2 を参照。

形式　～　二部形式　三部形式　ソナタ形式　etc.



a　お終いがソ（半終止）

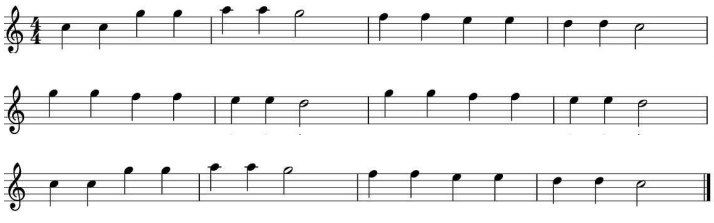
a’　二分音符が四分音符に
3 小節めがドミソに
4 小節めがミで

b　新しいメロディ

a　a と a’の融合で完全終止

と、「ちょうちょ」を分析してみたが、メロディは、a と b の 2 種類。で、最初の 2 段をまとめて A(a, a')、後半の 2 段をまとめて B(b, a)、それで、2 部形式と言う。(A, B)

さて、次はどうだろうか。



A(a, a')

B(b, b')

A(a, a')

こっちのほうが単純で、A と B しかないので「二部形式」と感覚的に思ってしまうのだが、この「普通の感覚」と異なるのが学術の世界なので（笑）、こちらが三部形式。英語の文法用語でもそうなのだが、このネーミングをなんとかしてほしいものだ。

さて、ソナタ形式だが、私も大好きな形なのだが、三部形式の発展形である。[*1]

A 提示部	（序奏） 第 1 テーマ　　基本となる調性 第 2 テーマ　　第 1 テーマと性格の異なるテーマ　属調、平行 結尾（コデッタ）　　提示部の終わり
B 展開部	1 テーマ、第 2 テーマを用いて展開していく。（序奏を絡める場合も） （作曲家の腕の見せ所！？）
A 再現部	第 1 テーマ 第 2 テーマ（主調） 結尾（コーダ）　　曲の終わり

ロンド形式（A-B-A-C … A-B-A）をソナタ形式でまとめたロンドソナタ形式もある[*2]。フーガ、カノンなど、形式が分かると音楽も楽しくなる！

*1　ちなみに、ヴァイオリンソナタ、ピアノソナタなどの「ソナタ」は、「鳴り響く」という意味のイタリア語「ソナーレ（sonare)」からきており、「奏鳴曲」と訳されることもあります。ちなみに、「歌う」は「カンターレ（cantare)」で、「カンタータ（cantata)」は「歌唱されるもの」の意。ソナチネ（sonatine（ソナティーネ)）は「小さなソナタ」の意。

*2　ベートーヴェン交響曲 2 番の終楽章など。ベートーヴェン交響曲 2 番はあまり演奏されることもないのだが、とてもいい曲なので、これを機にじっくりお聴き下さい！

ヴィブラート（vibrato）

想像してください。チェンバロ[*1] あるいはパイプオルガンの音楽を[*2]。いろいろな曲がありますが、例えば、バッハ、ゴールトベルク変奏曲

↑オルガン　（Goldberg-Variationen）BWV 988 を。　チェンバロ↑

当然ながら、これらの演奏にはヴィブラートはありません。お聞きになって、「物足りない」と感じますでしょうか?　あるいは「(シンプルで)いい」と感じますでしょうか？

今回、この「ヴィブラート」について書くにあたり、改めて、「昭和の曲」を聴いてみました。演歌では美空ひばりや都はるみ、内山田洋とクールファイブなど、低めの音程から入って幅の広い音程ヴィブラートです。小学生だった頃よく真似をして歌ったことを思い出しました。ポップスでも、岩崎宏美のような上手な歌手はたくさんいました[*3]。今聞いてもなかなかよいです。一方で、中島みゆき[*4] やユーミンのように、様々多様でしたね。

私がオーボエをやり始めた中学時代、どうやったらヴィブラートがうまくかけられるのだろうかと悩んだものです。エヴリン・ロスウェル『オーボエのテクニック』[*5] を読み、「ヴィブラートはかけるものではなくかかるものだ」という一文があり妙に納得してしまったことを今でも思い出します。子どもの頃はそんな曖昧な（しかもけっして正しいとは言えない）ことでも「納得」してしまい、意識的にかけようとせずに、「自然にかかるヴィブラート」をイメージして練習していました。今思えばそんなことはできるはずはありません。無駄な時間を過ごしてしまいました[*6]。

ヴィブラートは、その基本技術[*7] を修得し、必要なときに必要な振幅や強弱で意識的にかけるもので、音楽全般に言えることですが、イメージだけでは何もできません。そして、それこそ「自然に」できるようになるのには何年もかかるものです。[*8]

その「自然に」というのが曲者で、「そのヴィブラートは不自然じゃない？」という状況に遭遇することがあったり、「そのヴィヴラートは本当に必要ですか？」という疑問が出てきたりするようになって、はや〇年。

---

*1 ドイツ語で Cembalo、イタリア語で clavicembalo、英語で(harpsichord、フランス語で(clavecin)。ピアノのようにハンマーが弦を叩くのではなく、プレクトラムが弦を弾く。(ギターのピックのような)

*2 ピアノでもいいのですが、とりあえず、パイプオルガンとチェンバロのサンプルの QR コードをば。

*3 ロマンス、聖母たちのララバイ、すみれ色の涙、万華鏡その他もろもろ。

*4 学生時代から働き始めの頃好んで聴いていた中島みゆき。本論からは逸れるが、その中でも特筆すべきは、1978 年 4 月 10 日に発売された 4 枚目のアルバム『愛していると云ってくれ』に収録されている「元気ですか」。知っている人は知っている革命的な？「歌」。未聴の方はぜひ聴いてみて下さい！（「うらみ・ます」も暗い曲だが、ラジオで喋る彼女は正反対。そのギャップもとてもよかった。）

*5 古典的名著とも言われることもあるが、今となっては「古典」。1965 年。アマゾンで調べたら 1998 年のペーパーバックが 7,846 円で売られていた。(もちろん used)　自宅の本棚探すと出てくると思うのだが、どうしようかな。(笑)

*6 本も重要ではあるが、楽器は特に最初に適切な指導者に教わることが非常に重要だ。(スポーツも)

*7 歌や管楽器であれば横隔膜の支えとコントロール。口や喉のヴィヴラートもあることはあるがあまりよろしくない。(←個人の感想です)

*8 とはいえ、技術習得の後には、演奏のイメージというものが非常に重要になってくる。初心者・初級者と上級者やプロとはある意味まったく違うアプローチが必要なのだ。

かつてアマチュアオーケストラで、弦楽器に対し「音を鳴らす前からヴィブラートをかけて! 」という指揮者の指示に遭遇したことがありました。何の曲か忘れてしまいましたが、当時は今ほどにいろいろ考えていなかったので、「そんなものなのか」と思っていたましたが、今では「音程を正確に取ってから必要性に応じてかけるべきだ」と思います。[*1]

現在、私はヴィブラートのないストレートな音[*2] が心地よく、不自然なヴィヴラートを耳にすると気持ち悪くて仕方ないと感じる人間になってしまいました。人間変わろうと思えば、いや、変わろうと思わなくても、変わる時は変わるものです。[*3]

ロマン派以降の「歌う」必要があるメロディではヴィブラートが必要な面もあるかもしれなませんが、あらゆるところで無意識にヴィブラートをかけてしまっていたりすると、それは逆に音楽を損なうことになってしまいます。

和声を響かせたい時、ヴィブラートは邪魔になります。金管楽器の経験がある方は経験なさったことがあるのではないかと思いますが、例えば、トロンボーン 3 本で、Ⅰの和音（何調でも。ドミソ）を鳴らす時、ソは約 2 セント広く[*4]、ミは約 14 セント低くします（セントは半音の百分の一）[*5]。その時、この 3 つの音の周波数は 4:5:6 の整数比となり、非常に心地よく響きます。f で奏でると「空気が割れるような」響きがします。ヴィヴラートは、それが音程ヴィブラートでなくても強弱ヴィヴラートであったとしても、この純正律の協和音には邪魔になります。[*6]

メロディであれば、必要がある場合には、効果的なヴィブラートもありかとは思いますが、基本的にはメロディでもヴィブラートは不要だと考えます。和声の時には全く不要と言っていいでしょう。歌はあってもいいかなぁとは思いますが、グレゴリオ聖歌を聴いてどう感じますか？[*7]

グレゴリオ聖歌 Kyrie XI↑

文字だけではイメージできないと思いますので、実際に聴いてみてください。最近（といってももう結構経ちますが）ピリオド奏法も増えているのでいろいろな演奏があって楽しいです。ぜひロジャー・ノリントンの演奏をお聴きになってください。LCP[*8] もいいですが、モダン楽器の SWR[*9] もいいです。（対向配置を採用しているジンマンやベルグルントもいいです！）

---

*1 おそらくロマン派であったろうその曲はその指揮者にとってはそう演奏したかったのだろう。

*2 ノリントンの言う「ピュア・トーン」

*3 意識して変わろうと思ってもなかなか難しいかもしれない。でも不可能ではない。無意識に変わっていくこともある。「ビビビ」っと感じることが重要かも。（それを悪用する人たちがいることも。。。）

*4 弦楽器の、完全 5 度（2 セント広い）でのチューニングは、特にチェロのように、一番高い音から一番低い音に順に合わせていくと、一番下の音がわかる人にはわかる程度に低くなってしまう。機会がありましたら、お近くのチェロ弾きにどうしているのか聞いてみてください。

*5 純正律や平均律の話もしたいところだが、これまた長くなるので、今回は省略。また別の機会に。（すぐに知りたい方はネットで多くの人が解説していますのでそちらを！）

*6 音程ヴィヴラート、強弱ヴィヴラートの違いを理解 and/or 演奏できる人はどれくらいいるだろう。

*7 もちろん、全ての音楽がグレゴリオ聖歌ではありませんが、一助として。

*8London Classical Players。1978 年にノリントンによって設立されたイギリスの古楽器オーケストラ。

*9 シュトゥットガルト放送交響楽団（Radio-Sinfonieorchester Stuttgart des SWR）。1998 年 - 2011 年ノリントンが首席指揮者。QR コードは 2011 年 London, Proms でのライヴ録音のマーラーの 9 番！

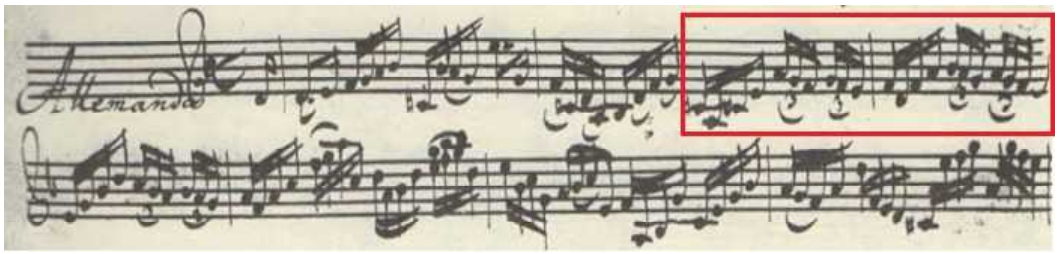
Johann Sebastian Bach ヨハン・ゼバスチャン・バッハ

1685 ～「アイゼナハ時代」3 月 31 日、大音楽家の末子として生まれる。
1695 ～「オールドルフ時代」両親が没し、長兄に引き取られ、オールドルフへ。
1700 ～「リューネブルク時代」北ドイツリューネブルクで教会付属学校給費生に。
1703 ～「アルンシュタット時代」ヴァイマル宮廷楽師兼従僕、新教会オルガニストに。
1707 ～「ミュールハウゼン時代」マリア・バルバラと結婚、 7 人の子どもをもうけた。
1708 ～「ヴァイマル時代」現存するオルガン曲の大半を作曲。イタリアの影響を受けた。
1717 ～「ケーテン時代」『ブランデンブルク』、『無伴奏ヴァイオリン』等室内楽を作曲。
1723 ～「ライプツィヒ時代」ライプツィヒでトーマス教会カントルに就任。『マタイ』、『ヨハネ』などを作曲。『ロ短調ミサ曲』を完成後視力を失い、『フーガの技法』未完のまま 1750 年 7 月 28 日没。65 歳。

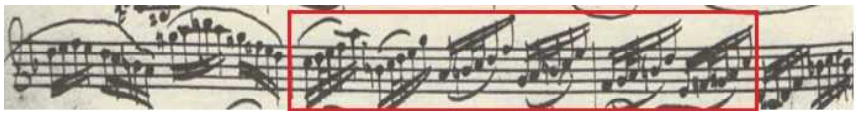
無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第 2 番ニ短調 BWV1004 より

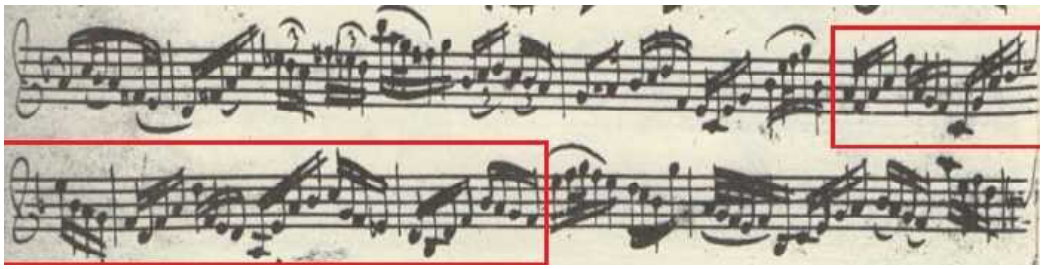
アルマンダ、コレンテ、サラバンダ、ジーガの順にならんだ組曲形式の舞曲集。イタリア語で統一されている。[*1]

Allemanda　アルマンダ　4 分の 4 拍子



アルマンダとはドイツ由来の舞曲という意味で､少しゆっくりめのステップの曲である。16 分音符の連なりと 3 連符のセットが特徴。以下のリズムも耳に残る。

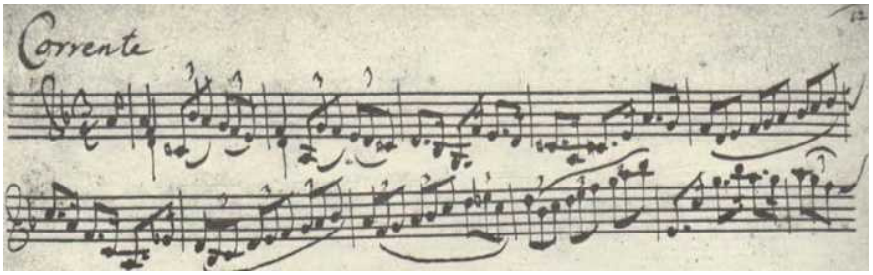




楽譜にはスラーやスタカート等の指示がないのだが、異なる演奏法でフレーズ感を出すことで、表情を変えています。

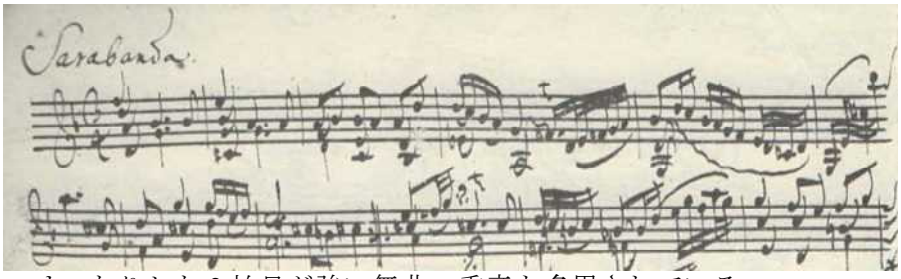
*1 この第 2 番はこの後に壮大な有名なシャコンヌが置かれている。今回は残念ながら割愛。

Corrente コレンテ　4 分の 3 拍子



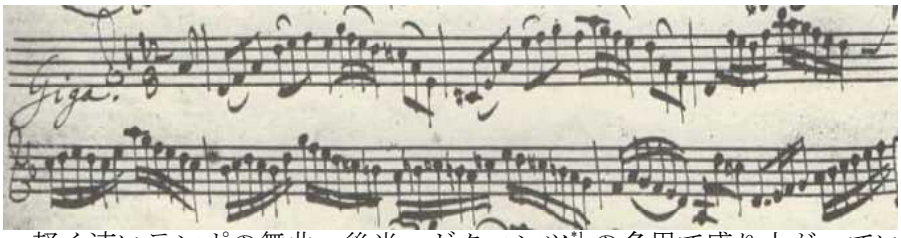
コレンテはイタリアの流れの速い舞曲。一方、フランスのクーラントはコレンテに比べてそれほど速くない。3 連符と付点のリズムが交互に繰り返されるのが特徴。付点のリズムを鋭くすることで、3 連符との違いがはっきり出てくる。

Sarabanda　サラバンダ　4 分の 3 拍子

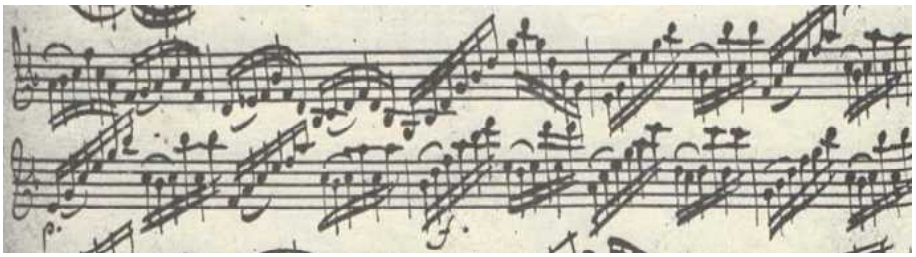


ゆったりした 2 拍目が強い舞曲。重音も多用されている。

Giga　ジーガ　8 分の 12 拍子



軽く速いテンポの舞曲。後半、ゼクエンツ[*1] の多用で盛り上がっていく。



この部分の 16 分音符には、最初の 3 つにスラーがあり、特に演奏指示はないのだが、演奏にあたり、3+3 と捉えるか、4+2 と捉えるかで表情が変わる。どう弾き分けたか解りましたか？　また、ここで p と f が書いてあるのも珍しい。

---

*1 ゼクエンツとは、2 小節以下の短い音型が、移調を重ねつつ繰り返されるもの。このゼクエンツをどう演奏するかが非常に重要。

Antonio Lucio Vivaldi アントニオ・ルーチョ・ヴィヴァルディ

一般的な解説はネット等に任せるとして、ヴィヴァルディ(1678-1741)は単なる作曲家でなかったということは「常識」として共有しておきたい。彼は、ヴァイオリニスト、音楽教師、司祭などと多方面で活躍していたのみならず、弦楽器に様々な新しい奏法を導入したことは特筆すべきだろう。それは当時の聴衆にとっては革新的なものだった。クラシック音楽も（バロック音楽も)、その当時の人たちには常に新しいものだった。

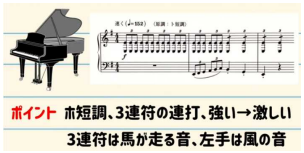
『和声と創意の試み』(Il cimento dell'armonia e dell'inventione）作品 8 は 12 曲からなるヴァイオリン協奏曲集で、その 1 番～ 4 番がいわゆる『四季』である。私が初めて聞いたとき、「ヨーロッパも日本も四季があって同じだ！」と思ったことを今でも思い出す。当時聴いたのは、ミケルッチのイ・ムジチによる演奏だったのだが、その後、その前のアーヨの演奏もい良いとのことで、聞き比べたところ、かなり演奏が違って興味深かった。

さらに興味深い演奏に出会うことになるとは当時は微塵も思わなかった。例えば、最近？では 2005 年 1 月発売のジャニーヌ・ヤンセンによる演奏。さらに遡れば、当時はまったく気づいていなかった 1977 年録音のアーノンクールの指揮ウィーン・コンツェントゥス・ムジクスによる演奏。アンテナ低すぎた高校時代[*1]。ちなみに独奏ヴァイオリンはアリス・アーノンクール。このアーノンクールの演奏は実におすすめ！[*2]

その演奏を改めて聞いてみると、その描写にあらためて感心する。音楽的？になめらかに演奏するのではなく、季節の移り変わりを、人や動物などの動きを巧みに表現している。このような演奏で当時の聴衆を驚かせたであろうと私も思います。

「描写音楽は低俗か？」「音楽はどうあるべきか？」というある種哲学的な論争は現在でも続いているのでしょうか。例えば、ベートーヴェンの交響曲第６番ヘ長調は本人による「田園」の標題どおり明らかに描写音楽で、我々も田舎育ちであればかなり共感するのではないでしょうか。一方、同時期に書かれた交響曲第５番「運命」の標題は本人によるものではなく、商業主義による捏造説もありますが、第１楽章のハ短調から最終楽章のハ長調まで聞き続けると、勝利というか勇気というかある種「運命的なもの」を感じてしまいます。こちらは「人間の精神的なものの描写」なのではないでしょうか。ベートーヴェンの交響曲第 9 番では歌が入りその意図がはっきりわかりますが、マーラーの交響曲の 1,5,9 番などは歌詞はないのですが、意図はわかるのではないでしょうか。[*3]

話は逸れてしまいますが、中学１年の音楽の教科書にシューベルトの歌曲「魔王」の解釈が載っているようですが、冒頭の三連符が「馬の足音」とされています。真面目で素直な少年少女（当時の私も？！）は、テスト対策でそう暗記してしまうかもしれませんが、みなさん、三連符で走る馬を見聞きしたことがありますか？　ふつう、ギャロップ[*4] ではないですか？　ではこの三連符はいったい何を？[*5]



（唐突に終了）

---

*1 当時に戻ってもっと勉強したい。。。（やっぱりイヤかも？（笑))

*2 さいたま市図書館にあります！

*3 交響曲 2，3，4 番ほか、歌入りも多い。

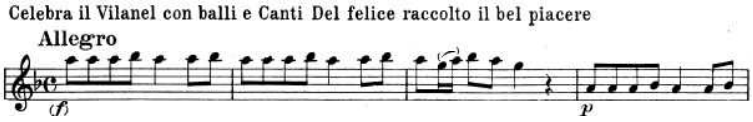
*4『ウィリアムテル序曲』『「道化師」第二曲「ギャロップ」』等参照。

*5 車田氏ののサイトは興味深いです。「魔王」関係は 車田 魔王 で検索するとヒットします。ぜひ！

Il cimento dell'armonia e dell'inventione　和声と創意の試み

Concerto in Fa majore　“L'Autunno”　協奏曲 へ長調 『秋』

第１楽章　Allegro　４分の４拍子



Celebra il vilanel con balli e canti del felice raccolto il bel piacere,

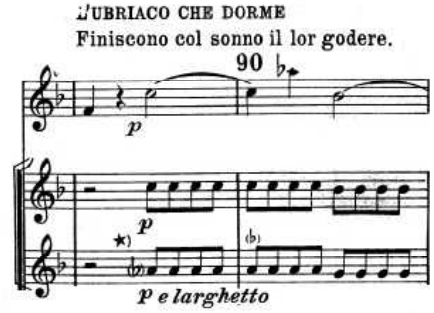
celebrate	dance	song	happy harvest	beautiful pleasure
祝う	踊り、	歌	幸せな収穫	美しい喜び

L'UBRIACO　酔っ払い

E del liquor di Bacco accesi tanti

And of the liquor of Bacchus lit many

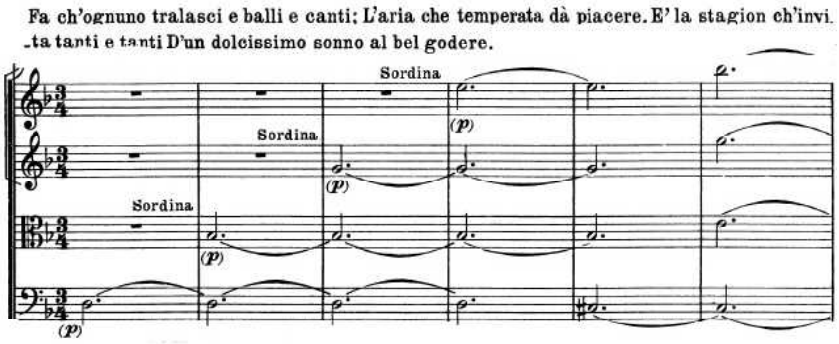
そして、バッカスの酒　火を付ける　多く



Finiscono col Sonno il lor godere

finish	with	sleep	enjoyment
終わる	睡眠とともに		楽しみ

第２楽章　Adagio molto　４分の３拍子



Vn1				E	E	B ♭
Vn2			G	G	G	G
va		B ♭	B ♭	B ♭	B ♭	E
vc	D	D	D	D	C#	C#

※ vc の D(レ)に始まり、次の小節で va の B ♭(シ♭)が鳴り、次に 2nd の G(ソ)が入り、g-moll が確定するのだが、次に 1st が E(ミ)を鳴らすことで摩訶不思議な和音となる。(低音の D を除けばミソシ♭の減三和音。) そして、５小節めで低音が C ♯となり、減七の和音(ディミニッシュ)となる。その後、D7、E ７、diminish …と続いていく。

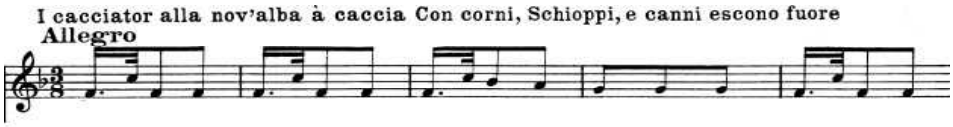
Fà ch'ogn'uno tralasci e balli e canti;
Make each one omit and dance and sing
させる　各々　忘れ　踊りと歌

E **la Stagion ch' invita tanti e tanti**
And the season that invites many and many
季節　招く　たくさんたくさん

L'aria che temperata dà piacere,
The air that tempered gives pleasure
穏やかな空気　与える　喜び

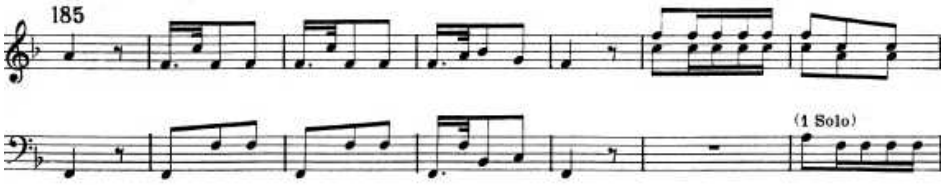
D**'un dolcissimo Sonno al bel godere.**
Of a sweetest sleep to the lovely enjoyment.
最上の甘い眠り　美しい楽しみへの

第３楽章　Allegro　8 分の 3 拍子

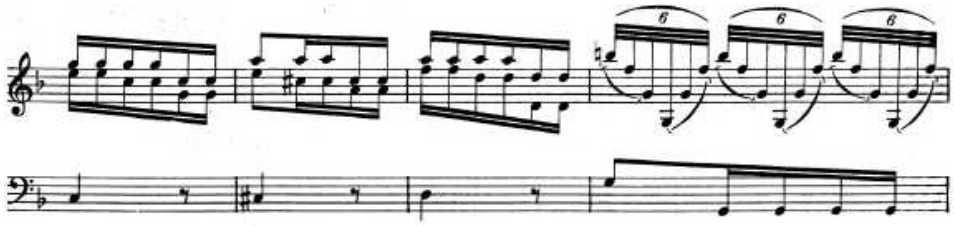


I cacciator alla nov' alba à caccia
The hunts men come out at the crack of dawn
猟をする男たち　出てくる　夜明けに

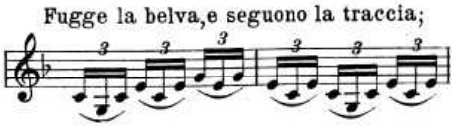
Con corni, Schioppi, e canni escono fuore
with their horns, guns and hounds;
角笛と銃と猟犬と



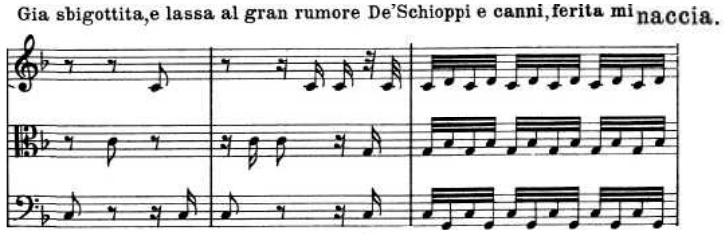
Vn と Vc の掛け合い



掛け合いは続く。Vc のオクターブの動きの上で、6 連符の分散和音。

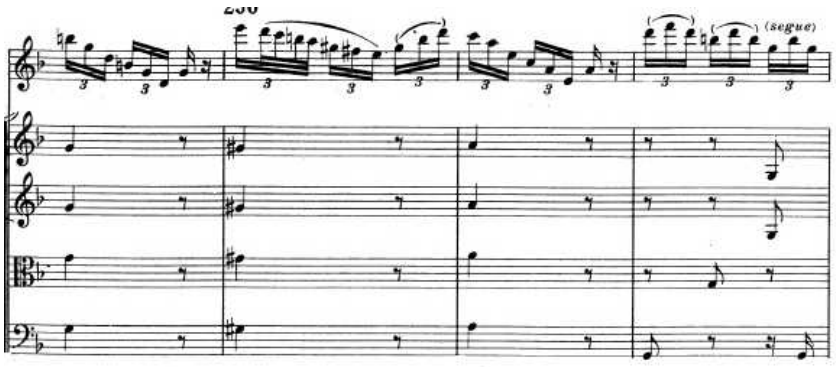


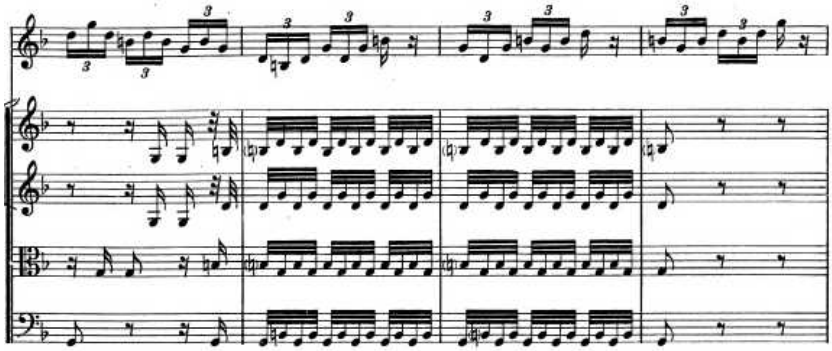
Fugge la belva, e seguono la traccia;
Flees the beast, and they follow the trail;
獣が逃げ出し、その跡を追う



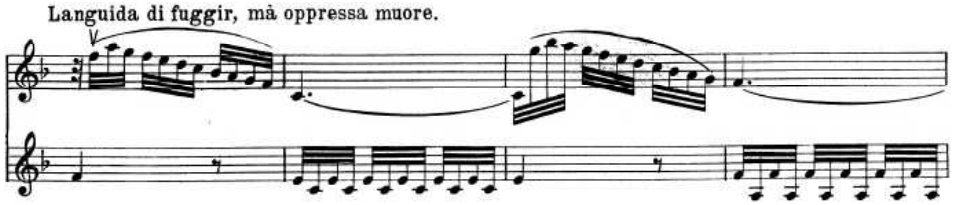
Già sbigottita, e lassa al gran rumore
Already stunned, and lax to the great noise
すでに茫然自失、 大音響に包まれ

De' Schioppi e canni, ferita minaccia
Of birds and reeds, wounded threatens
鳥と葦の、傷ついた脅威のために

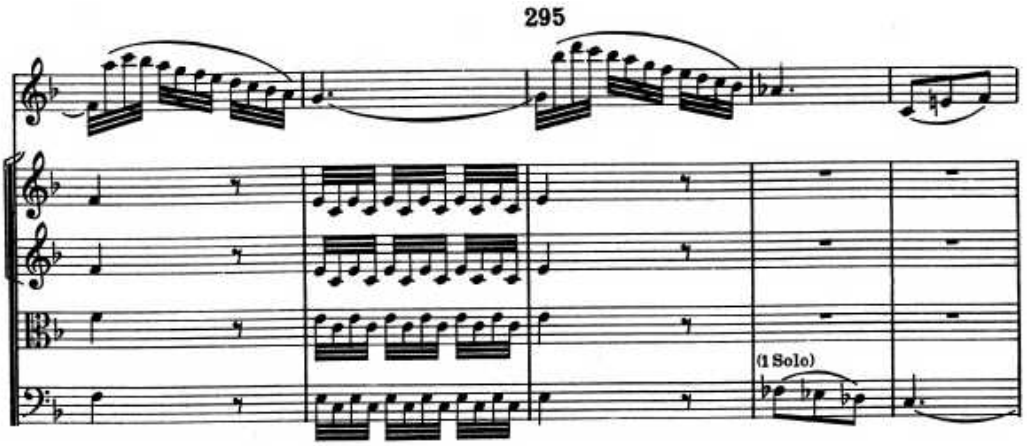


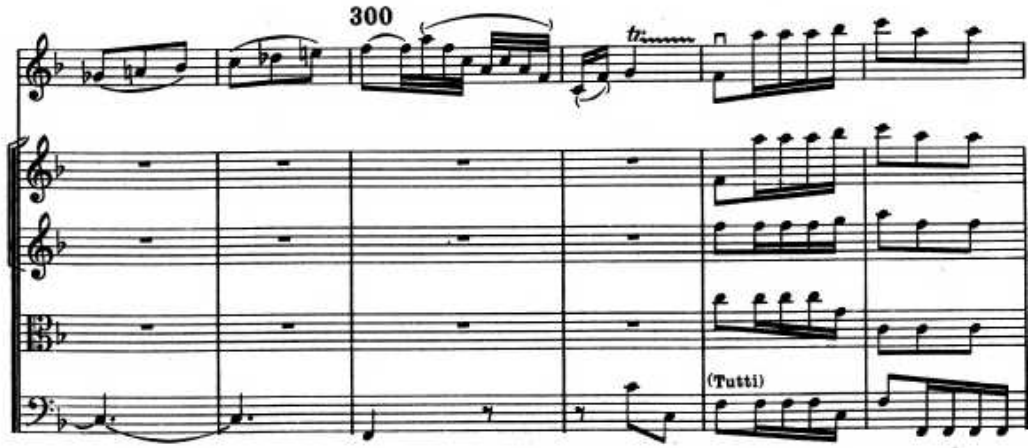


（ここは、獲物が逃げ惑い、男たちが追い掛ける？）



Languida di fuggir, mà oppressa muore.
Languid to flee, but oppressed dies.
弱々しく逃げるが、苦しんで死ぬ

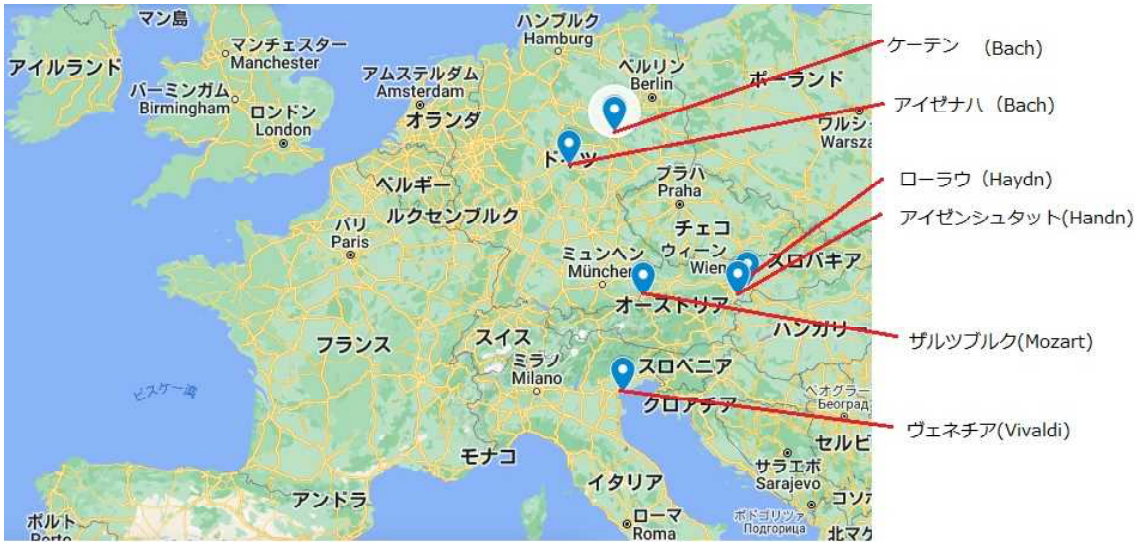


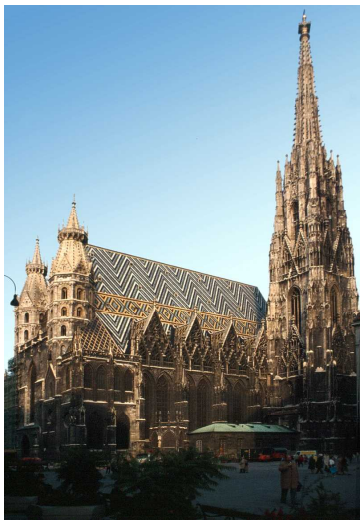


天に昇っていくような気がするのは私だけ?

そして、男たちは勇ましく帰って行く。

（訳出は、DL 翻訳を参考にしました）





シュテファン大聖堂（Wien）

ヴァルトブルク城（Eisenach）

エステルハーザ（Eisenstadt）

ジョヴァンニ・イン・ブラーゴラ教会（Venezia）

J. S. Bach
オーボエ・ダモーレ協奏曲 イ長調　BWV 1055

バッハは 1729 年から 1741 年にかけて、ライプツィヒのコレギウム・ムジクムの指揮をしており、バッハのチェンバロ協奏曲は、その演奏会のために作曲された（wiki)。

なぜ唐突にチェンバロ協奏曲の話なのかというと、このダモーレ協奏曲はチェンバロ協奏曲第 4 番イ長調から再構成されたからです[*1]。ということは、原曲がチェンバロ協奏曲でそれをダモーレ協奏曲に編曲したのか、というとそうではなく、ダモーレ協奏曲が原曲らしい。両方聞いてみて、どちらだと感じるか、楽しんでみてください。[*2]

さてさて、バッハは『ミサ曲 ロ短調』や『マタイ受難曲』などでオーボエ・ダモーレを好んで用いているのだが､時代とともにダモーレの使用頻度は下がっていってしまった。というか、もはや「絶滅危惧種」となってしまっている。なぜだろう？[*3]　悲しき「愛のオーボエ」。

この曲は、ハ長調にしてオーボエで演奏されることもあります。オーボエでやろうかなと思っていたところたまたまダモーレを入手したのでダモーレでやることにしたのですが、そのダモーレはセミオート[*4] なのです。私は中学以来フルオート[*5] のオーボエを使用してきたので、セミオートの楽器は苦手なのですが、頑張ります。ダモーレの音色をお楽しみください。

第 1 楽章 アレグロ　イ長調、2 分の 2 拍子。

お約束の？リトルネッロ形式で弦楽器の合奏により、分散和音のテーマが奏でられる。１小節めの音符を見れば、ラ、ド♯、ミ、すなわち A-dur（イ長調）のドミソ（Ｉの和音）であることがすぐわかるでしょう。では問題です。２小節めは何の和音？[*6]

そしてそのテーマが終わると同時にダモーレが次のテーマを奏で始める。

---

*1 ニ長調の BWV1053 も同様。

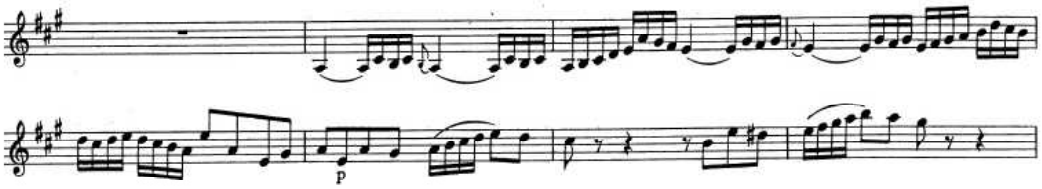
*2 youtube でも聞けますので、ぜひ。（"BWV1055 動画"で検索するのが速いですかね）
オルガンでの演奏もあります！（JONATHAN SCOTT）これまたなかなか趣深い。

*3 クイズあるいは学校のテストのような「答え」を求めるのではなく、いろいろ考える、あるいは仲間といろいろ話し合うのがいいですね！

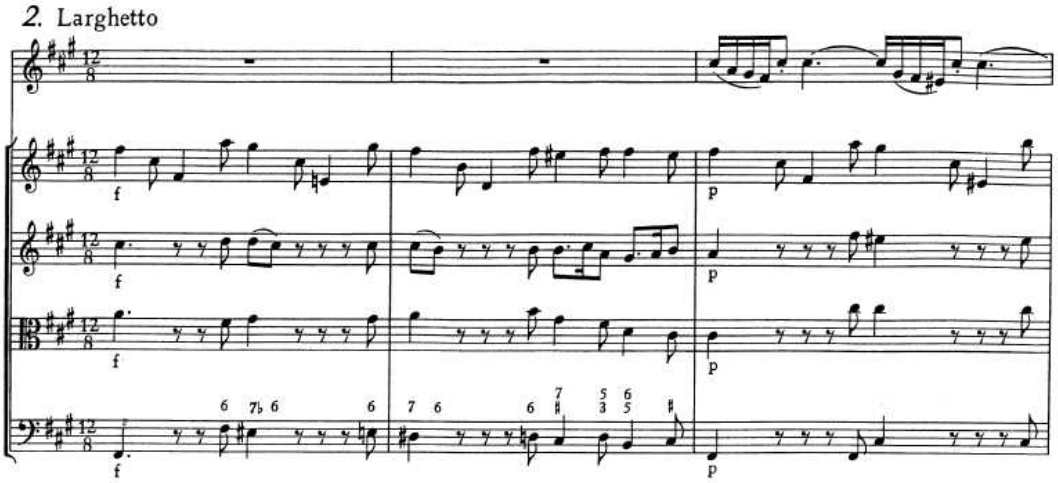
*4 現代のオーボエは大きく分けて、セミオートとフルオートの２種類です。（マニア的にはウィンナオーボエやサムプレート等いろいろあるのですが、興味を持った方はとりあえず wiki にいろいろ載っていますので、ぜひ。）

*5 多数派のセミオートの楽器では 2 オクターブめから第 1 オクターブキーを押さえ、その上のラ、シ、ドになったら第 2 オクターブキーを押さえます。その部分を g キーと連動して自動化したのがフルオートです。詳細はお近くのオーボエ吹きにお聞きになってください。現物を見るとすぐわかると思います。（その上のミ以上は第３オクターブキーを押さえます。この辺になると楽器によって鳴りやすい指使いとかあって難しいです。）（入門モデルではこの第 3oct キーがないものあります。どうやって出す？　初心者は出さないか。。。）

*6 ソ♯、シ、レの減三和音ですが、属七（V_7）の根音（ルート；ミ）抜きですね。



第 2 楽章 ラルゲット　嬰ヘ短調、8 分の 12 拍子。



A-dur の平行調の fis-moll で、低音の半音下降（ラメント・バス）[*1] がこの楽章を特徴付けているパッサカリア[*2]。8 分の 12 拍子ということは、1 小節に八分音符が 12 個入るということで、6 ＋ 6 と感じるか、3 ＋ 3 ＋ 3 ＋ 3 と感じるか。さすがに 1 × 8 や 2 × 6 とは感じないだろう。4 ＊ 3 はここではないですね[*3]。パッサカリアというかシャコンヌというか、変奏曲というかロンドというか、弦楽の動きとともにメロディをお楽しみください。

---

*1 嘆きの低音（半音の下降音型は低音に限らず「嘆き」ですね。洋の東西を問わず。）

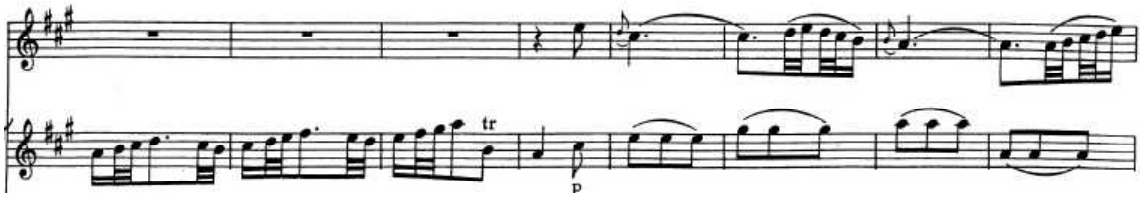
*2 シャコンヌとパッサカリアの違いを厳密に議論する必要はないと思うが、少しだけ。シャコンヌはもともとスペインのチャコーナ（chacona）が起源でそれが、イタリア、フランス、ドイツに広まっていき、徐々に区別がなくなった。ざくっと言えば、シャコンヌはもとが 3 拍子の長調の舞曲、パッサカリアはゆったりした短調、というところです。クヴァンツが両者の区別をしようとしたのだが徒労に終わったということで、その頃から両者の区別は曖昧になっていたというか、発展的に混同していったというべきか。要するに、同一の繰り返し、変奏曲的な、ロンドのようなもの、でいいでしょう。（参考 https://www.osaka-geidai.ac.jp/assets/files/id/842 樋口光治氏）

曲で確認したい人は、バッハのパッサカリアとフーガ、ホルストの第 1 組曲の第 1 楽章（吹奏楽経験者はほぼみなご存じ？）、さらにマニアはブラームスの交響曲第 4 番の第 4 楽章を！

*3 ×（かける；積）の表記について、みなさんはいつ頃ぎもんをもちました？　つまり、2 × 5 ＝ 10 が意味するのは、日本では、2 が 5 個。しかし、英語では、2 倍の 5 つまり 5 が 2 つ、two times 5 なんですよね。もっとも、数学（算数）的には、積は交換法則が成り立つので、2 × 5 でも 5 × 2 でも同値なわけで、計算しやすいほうでやればいいと思うのですが、小学校ではバツにする先生もいるようで、どうなんでしょうね。

第 3 楽章 アレグロ・マ・ノン・タント　イ長調、8 分の 3 拍子。

リトルネッロ形式によるフィナーレで、躍動感溢れる舞曲風の弦楽合奏の主題で始まる。



そして、そのテーマが終わると、ダモーレが次のテーマを奏で始める。軽快に過ぎていく（であろう）3 楽章をお楽しみください。

Oboe d'amore

さてさて、何よりも、みなさん、オーボエ・ダモーレという楽器をご存じでしょうか。知る人ぞ知る、知らぬ人は知らぬ（←当たり前）、なかなか普段お目にかかることはないのではないかと思います。今回、たまたま入手してしまった(？)ので、ご披露をば、と半年間練習してきました。

そもそも、オーボエそのものも知られているような知られていないような楽器ですが、少々紹介させてください。詳しくはネットで調べていただければいくらでも出てくると思いますので、軽く。ほんの少し、、、軽く。。。

普通のオーボエは C 管。ソプラノ・リコーダのような感じです（実際はそのオクターブ下）。そして、イングリッシュ・ホルンまたの名をコール・アングレは F 管、アルト笛のようなものです（実際はそのオクターブ下）。ドヴォジャークの交響曲第 9 番の 2 楽章は有名ですが、同じく交響曲第 8 番でもイングリッシュホルンが使われています。わかる人はかなりマニア！

初めてアルト笛を学校でやったとき、「なぜ F 管としてやらないのだろう？」と疑問に思ったことを今でも思い出します。ソプラノ・リコーダのドの指で音を出すと、ファがでます。ソの指がド、と両方覚えようとするとこんがらがります。移調楽器としてやったほうがいいんじゃないのかなぁ。。。[*1]

さらにその下に、バス・オーボエまたの名をバリトン・オーボエというオーボエの 2 倍の長さを持つオーボエもあります。これは通常のオーボエの 1 オクターブ下がでます。ホルストの惑星で何回か出てきます。マニアにしかわからないでしょうが、一度注目して聞いてみると面白いと思います。ぜひ探してみてください。

さて、オーボエ・ダモーレですが、これはオーボエとイングリッシュ・ホルンの間くらいの長さで、A 管です。C 管より三度（短三度）低くなります。ダモーレはイタリア語の d'amore で英語で言えば with love あるいは of love、すなわち「愛のオーボエ」となります。

*1 絶対音感がある人は逆にわかりにくい？

通常のオーボエは、ともすると篳篥（ひちりき）のような、どちらかというとうるさい感じの音になってしまいがちだったりしますが、ちょっと管を長くすることでメロウというかマイルドになります。[*1]

逆に、クラリネットの Es 管のように、オーボエにも短い F 管あるいは Es 管のミュゼット別名ピッコロ・オーボエというのもあります。ほとんど使用されることはなく、私は見たことないので、機会があればぜひ吹いてみたいような吹きたくないような、、、。

（左から、ミュゼット、オーボエ、ダモーレ、アングレ、バスオーボエ、ヘッケルホーン。wiki より）

バス・オーボエと同じような音域でヘッケル・ホーンという楽器があります。ドイツの楽器製作者ヴィルヘルム・ヘッケルが考案したもので、彼が 23 歳の時にヴァーグナーの話を受け、1904 年に完成させたもので、リヒャルト・シュトラウスの「サロメ」、アルプス交響曲などに登場します。残念ながらヴァーグナーはその音を耳にすることがありませんでした。ヘッケルホーンもバスオーボエ同様機会がありましたらぜひ探して、聞いてみてください。

さらに、ルポフォンという新種の「バス・オーボエ」もあります。ヘッケルホーンをバス・クラリネット風に折り曲げて吹きやすくした感じでしょうか。

「一般の愛好家でルポフォン（普通のオーボエより 1 オクターブ下を奏し、従来のバリトン・オーボエに近似）を聴いた人はあまりいないのではないか。それもそのはず。この楽器は 2009 年に生まれてまだ進化しつつある、いわば新種のバス・オーボエ。その豊かで陰影深い響きは魅力的だ。」（CD ジャーナルデータベースより）

この CD は 2013 年 9 月の録音で、ハイドン：バリトン三重奏曲第 101 番ハ長調 Hob.XI:101（ルポフォン、ヴィオラ、チェロ　オリジナル：バリトン、ヴィオラ、チェロ）など、なかなか興味深い。県立図書館にあります。（『ルポフォン～新種のバス・オーボエの可能性に迫る』加納律子他）

（よろしかったら以下をどうぞ。（youtube））　　◎お薦め

3 heckelphons　　lupophon　　bass oboe　　3 本の比較

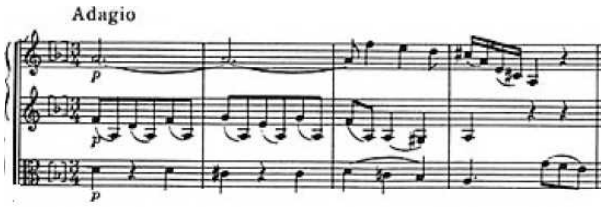
*1 ちなみに、クラリネットの B 管と A 管は半音しか違わないのに、音色が大分違います。さらに C 管クラリネットというのもあるらしいのですが、残念ながら直接見たことも聞いたこともありません。どなたか見たり聞いたりしたことある人いますか？　また C 管トランペットというのもありますね。吹きにくいそうです。どなたか持ってます？

Franz Joseph Haydn　フランツ・ヨーゼフ・ハイドン

1732 年 3 月 31 日、神聖ローマ帝国オーストリア大公国ローラウにて生まれる。
1740 年から 9 年間ウィーンに住み、シュテファン大聖堂で聖歌隊の一員として加わる。
1749 年、変声のため高音部を歌うのが不可能になり解雇される。
1757 年ごろ、ボヘミアのモルツィン伯爵（Karl von Morzin）の宮廷楽長の職に就いた。[*1]
1761 年、西部ハンガリーの大貴族、エステルハージ家の副楽長となる。その後 30 年間エステルハージ家に仕え数多くの作品を残す。1768 年から 1773 年頃を「シュトゥルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）」期と呼び、様々な技法を用いた。
1781 年頃、ハイドンはモーツァルトと親しくなった。（1791 年モーツァルト没。）
1790 年エステルハージ家のニコラウス侯爵が死去。その後継者アントン・エステルハージ侯爵は音楽に関心を示さず、音楽家をほとんど解雇し、ハイドンに年間 1400 グルデンの年金を与えて年金暮らしにさせた。これはハイドンにとっては良かったようだ。
1809 年 5 月 31 日、77 歳にて没。

交響曲第 34 番 ニ短調 Hob.I-34（1763-65?）

第 1 楽章　Adagio ニ短調 4 分の 3 拍子　ソナタ形式



低音のレの音[*2] に 1stVn のラ、その間を縫うように 2ndVn が和声を決める。一瞬「序奏」のように思ってしまうのだが、半終止の A Cis E のフェルマータの後、４小節を経て、第２テーマに入る　。

このフェルマータ後の４小節も、低音の F（ファ）の上で何調に行くか彷徨っている感じ。

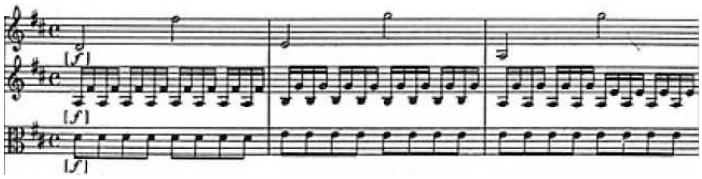
そしてｐｐで始まる第２テーマがヘ長調と思いきやミ♭で属七のような響きとなりやや驚くが、後にはっきりヘ長調となり明るく終わる。[*3]

展開部は、平行調の F-dur で始まるが、４小節後、突然の f のユニゾンで驚かされる。
その後展開していき、再現部へ。第１テーマは冒頭同様だが、第２テーマは１音（長二度）上の g（ソ）から始まり、コーダに向かう。[*4]

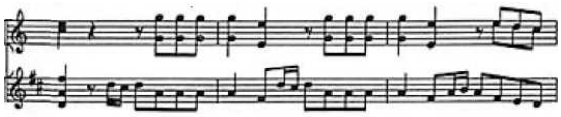
---

*1 ここで最初の交響曲である交響曲第 1 番が書かれた。交響曲第 37 番の筆写譜には 1758 年の日付が記されており、これらの曲は 1757 年ごろに書かれたと考えられる。
*2 楽譜はヴィオラまでで省略してある。ハ音記号は慣れれば慣れるんだろうが、慣れないと慣れない。（←いつもの、当たり前）
*3 そしてリピートして再び暗いニ短調へ。
*4 おしまいの d-moll がそれほど暗い感じがするのは私だけ？

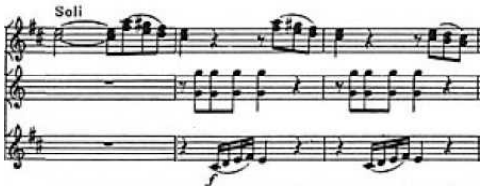
第 2 楽章　Allegro　ニ長調 4 分の 4 拍子　ソナタ形式



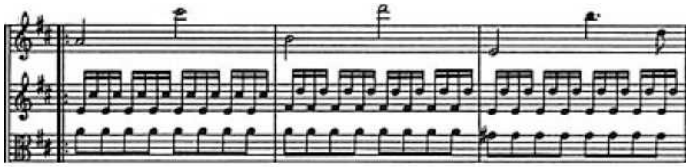
打って変わって、まさに Allegro、明るいニ長調。1stVn の跳躍のメロディがまさに跳躍感を与える。[*1]



（←上が Hr。D 管。下が Vn）
2 拍めアウフタクトからのユニゾンにホルンの相の手が加わり、第 2 テーマへ。



A-dur となって、低弦の A の刻みの上でオーボエの三度が美しく響き、ホルンと Vn と会話をする。その後、和声進行、音階進行を経て、オーボエと他の楽器の対話のコデッタへ向かう。[*2]

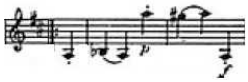


属調の A-dur の第 1 テーマで始まる展開部。どのように展開していくかお楽しみください。コデッタにでてきたテーマがちょっと変わって再現部へなだれ込む。

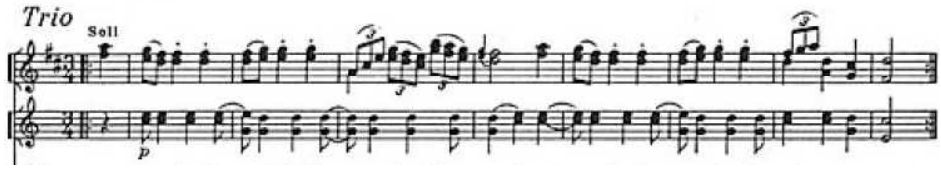
再現部では第 2 テーマが省略され、あっさりコーダへ向かう。

第 3 楽章　Menuet - trio, moderato　ニ長調 4 分の 3 拍子

アウフタクトから始まるメヌエット。三連符も顔を出し流れるように終わる。



後半では左の音型が繰り返された後、少々展開して終わる。



軽やかなオーボエのメロディとホルンのシンコペーションが心地いい。後半も同様に展開していき、ダ・カーポで冒頭に戻る。[*3]

第 4 楽章　Presto assai　ニ長調 4 分の 2 拍子　三部形式

ニ長調→ニ短調→ニ長調の三部形式。Vn の 3 連符が 8 分の 6 拍子のようにも聞こえ、イタリア風ジグ。三部形式の中でさらに A-B-A, C-D-C, A-B-A となっており、CODA で ff となり、V → I → I で終わる。

---

*1 この同じようなことを繰り返して言うのを「何論法」「誰論法」って言いましたっけ？

*2 そして再現部リピート。

*3 メヌエットのダ・カーポもすべて繰り返すべきだ、という人もいる（し、そういう演奏もある）。みなさんはどっち派ですか？

交響曲第 59 番　Hob.I-59　“Feuersymphonie”　（1766-68）

いわゆる「シュトゥルム・ウント・ドラング期」の交響曲。自筆原稿は残っていない。

『火事』という愛称はハイドン本人によるものではないようだが、ある筆写譜には「1774 年にエステルハーザでカール・ヴァール（Karl　Wahr）一座によって劇『火事』が上演された時にその付随音楽として作曲された」と書かれている。[*1*2]

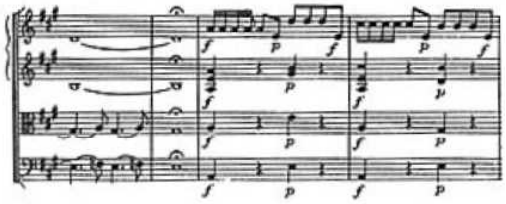
ハイドン作の「火事」関係では、Hob.XXIXa:4　人形歌劇「火事に遭った家」（消失）、Hob.XXIXb:A ジングシュピール「火事」、Hob.XXX:2 「火事」（消失）があり、現在、CD で「人形劇のためのジングシュピール『火事』」を入手することができる。[*3]

曲を聴くと、確かに劇的であり、幕間音楽あるいは舞台音楽として作られたとも思える。みなさんはどう感じましたか？

第 1 楽章　Presto　イ長調　4 分の 4 拍子 ソナタ形式

快活に動き回る様子を感じるのは私だけ?

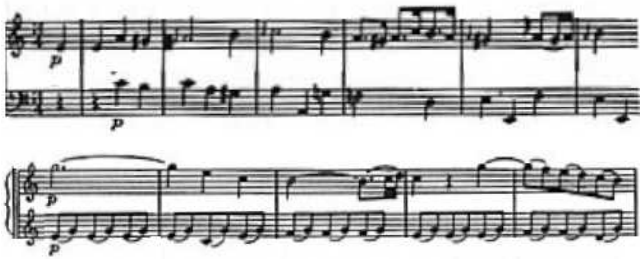
３連符の第２主題ぐるぐる回っている感じ。



再現部は、突然のフェルマータも面白いし、フェルマータ後のスタートもアウフタクトからの１小節がなく、ここもまた面白いところである。

提示部も曲の終わりも静かに終わる。

第 2 楽章　Andante o piu tosto allegretto　イ短調　4 分の 3 拍子　ソナタ形式



a-moll（イ短調）の弦楽合奏で始まるもの悲しい２楽章。（仮に A メロ）

力強いユニゾンの後、平行調の C-dur（ハ長調）になり、解放される。（仮に B メロ）

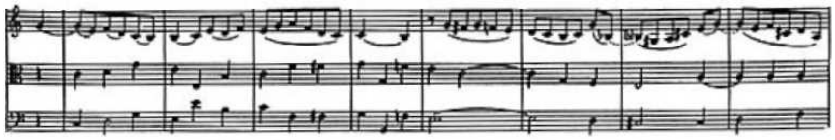
---

*1 エステルハーザ：エステルハージ侯ニコラウス 1 世が夏の別荘として建設したノイジードラー湖畔にある「ハンガリーのヴェルサイユ宮殿」。1766 年に完成。女帝マリア・テレジアも絶賛した豪華なオペラハウスのほか、コンサートホールや、人形劇のための劇場も設置された。ハイドンはそれらの用途に合わせた作品を数多く作曲した。

*2『大火事』（Die Feuersbrunst, Hob. XXIXb:A）が上演された。

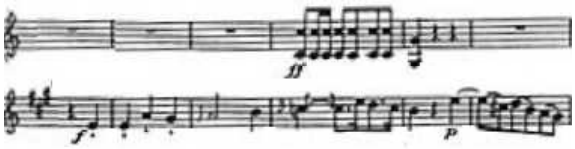
*3　“Die Feuersbrunst”は、本来は『大火事』や『大火』。

2009 年ハイドンイヤー記念 CD



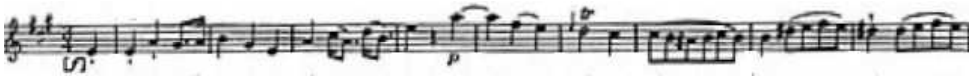
Vn がオクターブのユニゾンでメロディを奏でる。係留音が楽しい。（仮に C メロ）

以上の提示部が繰り返された後、C メロから後半へ進み、A メロが顔を出して突如終わる。A-dur となって、管楽器が B メロを奏でる。冒頭の A メロがフォルテで力強く出てくると、



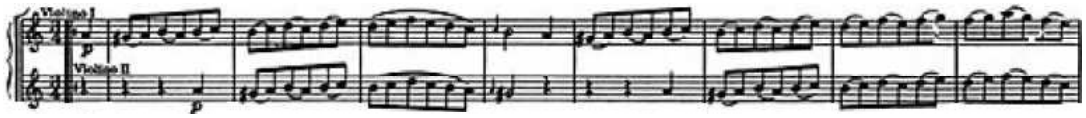
ホルンのファンファーレで突如終わり、再び弦楽器のみになって C メロが聞こえてくる。最後は管楽器が加わって、A-dur となり、繰り返しなしで終わる。

第 3 楽章 Menuetto-Trio　イ長調　4 分の 3 拍子



f のユニゾンで始まる３楽章。勘のいい人は気づいたと思いますが、冒頭のアウフタクトで始まる音型、ミミラソ♯が２楽章と同じです。が、メロディを聴いてわかるとおり、メジャー（長調）です。A-dur のメロディは V の和音（E-dur）で終わり、繰り返されます。後半はやや展開し、オーボエ Vn のユニゾンの後、 p で A-dur で終わる。

trio（弦楽合奏）

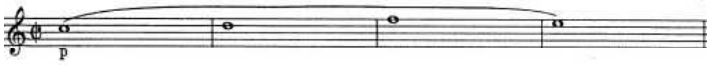


第 4 楽章　Allegro assai　イ長調 2 分の 2 拍子 ソナタ形式

印象的なホルンの「どーれーみー」（A 管）で始まり、オーボエが呼応する。その後 vn の八分音符から E-dur の分散和音を経てオーボエのコデッタで提示部が終わる。提示部リピート後、展開し、冒頭が顔を出して終了する。

ところで、知る人ぞ知る第 103 番『太鼓連打』の４楽章冒頭。

そして、有名なモーツアルト 41 番「ジュピター」の４楽章。



ジュピターは 3 小節めに「おまけ」で入って、なんとなく似ていると思いません？
（他にもいくつもありそう…）

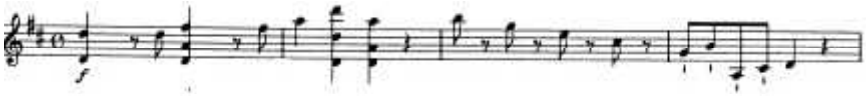
Wolfgang Amadeus Mozart ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

交響曲第 11 番ニ長調 K.84　（1770-02/07 ミラノ/ボローニャ）

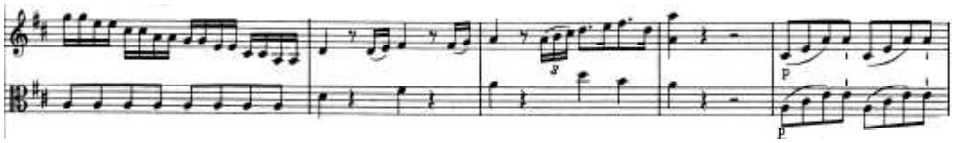
1756 年 1 月 27 日生まれのヴォルフガングは、14 歳になろうとする 1769 年 12 月～ 1771 年 3 月 28 日父とともに初めてのイタリアに行った[*1]。1770 年 4 月 25 日の手紙で「1 曲を書き終えてさらに 1 曲を作曲中」と記されており、また、8 月 4 日の手紙では「僕はもうイタリアの交響曲（itallienische Sinfonien）を 4 曲作曲しました」とある。この期間にイタリア風の曲をまとめて作曲したようだ。

このニ長調交響曲 K.84 も自筆譜がなく、ウィーン楽友協会の写譜にはモーツァルトの作曲とあり、ベルリン国立図書館の写譜の表紙には父レオポルトと記されており、偽作説もある。研究などからいちおう真作とされているようだが、みなさんはどう感じますか？

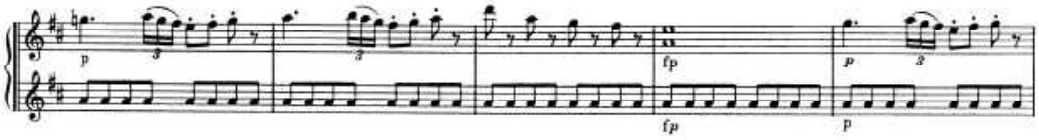
第 1 楽章 Allegro　ニ長調　4 分の 4 拍子　ソナタ形式



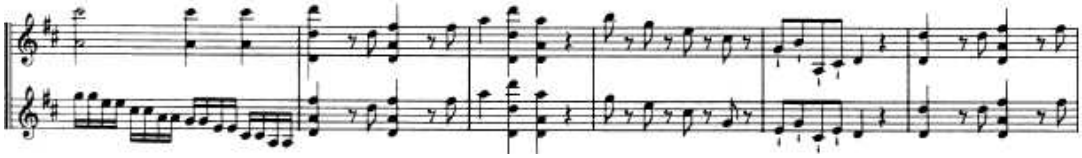
ニ長調のド、ミ、ソ、ドで始まり、アイネクライネナハトムジークを一瞬彷彿とさせられるが、「アイネク」は。1787 年 8 月 10 日にウィーンで作曲で、作品番号は K525 だ。
第 2 テーマはお約束どおり属調のイ長調（A-dur）で、柔らかく p で始まる。



提示部はリピートされずに、2ndVn の八分音符に先導され（譜例の前の小節後半）、展開部に入る。



10 小節足らずで再現し、

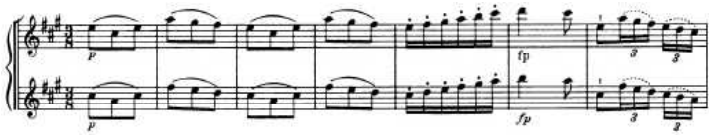


第 2 テーマがニ長調で始まる。

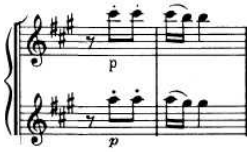
再現部もリピートせず、あっさり終わる。

*1　17 世紀イタリアでオペラの序曲がシンフォニアと呼ばれていたが、G.B.サンマルティーニがこの序曲のみを独立させ、演奏会用に演奏したのが起源とされる。

第 2 楽章　Andante　イ長調　8 分の 3 拍子　二部形式



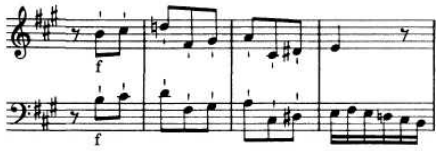
打って変わってなめらかなアンダンテの 3 拍子。A メロ。



B メロ。

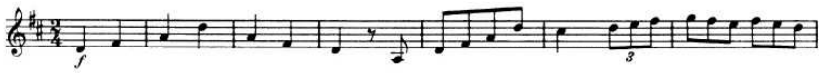
ヴィオラの分散和音ののちに Vn がメロディ。C メロ。

（arco の指示は、ヴィオラの分散和音の時にピチカートなので）



突然のユニゾン。
前半の ABC の大楽節と後半の AB'C’の繋ぎ。
そして後半の大楽節へ。最後は静かに終わる。

第 3 楽章　Allegro　ニ長調　4 分の 2 拍子　ソナタ形式

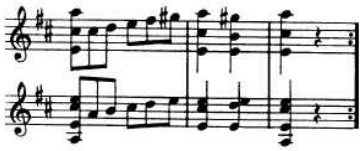


ニ長調のドミソ、I の和音の上昇と下降で始まり、3 連符が 6/8 風に聞こえる。

属調のイ長調の第 2 主題も三連符。

管楽器の和声に vn が三連符で加わり、
低音のメロディを経てコデッタへ。

よく見ると（よく見なくても）イ長調の下降音階！（ドシラソファミレド）



イ長調のドミソ→ソシレファ→ドミソの和音で終わる。

I	V_7	I
（ラド＃ミ）	（ミソ＃シレ）	（ラド＃ミ）

3 楽章で初めて提示部がリピートされる。

展開部がどう展開していくかをお楽しみいただいて、「始まりと終わりが同じ」という感覚もお楽しみください。（再現部もリピートされるので、戻った時の転調もお楽しみください。）

Vn solo & コン・ミス　藤本舎里

３歳より才能教育研究会にてヴァイオリンをはじめる。東京藝術大学を経て、同大学院修了。全日本学生音楽コンクール大阪大会小学校の部及び高校の部第２位。五十嵐由起子、澤和樹、景山誠治、故ゲルハルト・ボッセ各氏に師事。川口市芸術奨励賞受賞。アマチュアオーケストラとの協奏曲共演のほか、国内オーケストラや室内楽、ソロなど様々な分野で活動。後進の指導にもあたっている。奈良県出身、川口市在住。

オーボエ・指揮　山口尊実

埼玉大学教養学部教養学科卒業。幼少よりピアノを始め、小学生でトランペットを始める。中学の管弦楽部でオーボエに出会い、以後オーボエを続ける。宮本文昭、シェレンベルガー、茂木大輔、ルルー各氏らの演奏会や公開レッスンに足繁く通う傍ら、斎藤享久、渡辺克也、荒絵理子各氏らに師事。楽器：Oboe:LF、D'amore & EH:Bulgheroni
趣味：S660、virago1100、Mono-ski、ScubaDiving（Resuce Diver）、数学、バドミントン etc.

member

vn　藤本舎里，伊藤温子，豊島美紀，松尾沙樹，山田友香子，渡邉昭子
va　伊藤恵，高橋良暢　　vc　大和伸明　　cb 森田章
ob　大倉淳，小野川朋也　hr 林義昭，松沢宗一郎
cond,ob　山口尊実

◎団員募集しております。詳細はＨＰにて！

第８回演奏会のお知らせ

2023 年 7 月 16 日（日）13:30 開場 14:00 開演
リリア音楽ホール

曲目（予定）　J. S. Bach 無伴奏ヴァイオリンパルティータ第 3 番より
A. Vivaldi 「和声と創意の試み」より 第 4 番「冬」
G. P. Telemann オーボエダモーレ協奏曲 TWV 51:G3
F. J. Haydn 交響曲 30 番、交響曲第 58 番
W. A. Mozart 交響曲第 10 番

HP：http://kce.saitama.jp　　mail：bur@kce.saitama.jp